

## I タジクで移民を考える

昨年 11 月 28～29 日にタジキスタン共和国フジャンド市で開催された国際シンポジウム「中央アジアとロシアの移民の架け橋」に参加した。このシンポジウムは今回を含め 3 回目となる。ロシア科学アカデミー社会政治研究所社会人口経済社会学研究センターとタジキスタン国立法科商科政科大学の共催によって行われてきた。両機関とも極東地域研究センターとは学术交流協定を結んでおり、現地調査の協力を得ながら、毎年シンポジウムに参加してきた。

タジキスタン、ウズベキスタン、クルグズスタンからのロシアに向かう出稼ぎ労働者は、ロシアの労働市場の底辺を支える労働力である。タジキスタンの場合、非正規（不法）移民を含め毎年 100 万人から 120 万人が仕事を求めてロシアに向かい、彼らの海外送金はタジキスタンの GNP の約半分を占めると言われるほどである。

国際労働力移動は二国間の所得格差によって生じ、労働移民する動機は個人や家計の戦略として描かれることが多い。今回の国際シンポジウムにおいても、タジキスタン側の研究者でさえ、もっぱらそうした前提でタジキスタンからロシアへの出稼ぎ労働を描いていた。しかし、ソ連崩壊後に農村を含めコミュニティレベルでのインフラ整備からコミュニティの紐帯を維持する文化・伝統的活動の維持に至るまで、なんら政府や地域行政からの支援や補助を期待できなかった地域においては、個人主義的動機とともにコミュニティ維持に繋がるような動機が出稼ぎ労働に存在してきたのではないかと私は考える。この三年間、フジャンド市を州都とするソグド州の 3 カ所の農村コミュニティ（伝統的に見られる隣人コミュニティであるマハッラ）を調査するなかで、私たちは出稼ぎに出ている者たちが、出稼ぎで得た貯蓄および海外送金を家計消費に費やすのではなく、故郷の水道の敷設、井戸の改修、地区の小学校やモスク、集会所の整備などへの公共的な投資を行っていること、地域市場での起業や結婚式などを含む伝統的行事の維持に一役買っていることなどを観察してきた。フィールドワークで得たそうした知識の断片から、私たちは個人や家計の戦略としての出稼ぎ労働ではなく、コミュニティ戦略としての出稼ぎ労働を見いだそうと調査を進めている。新たなチャレンジではあるが、ここでの地域研究から生まれる新たな知見は豊富であり、うまい現地料理を食べながら聞く現地の人々の語りは刺激的である。

（文責：堀江）



写真 1. 家族やマハッラについて語る長老（フジャンド市郊外）。

## II FES：来し方・行く末

2001 年に富山大学に極東地域研究センターが設立されました。極東地域研究センターでは北東アジアの地域研究をしている以上、日本のみならず関連する地域をはじめとする世界へ研究成果を発信しなければならないとの思いから、英文雑誌 *Far Eastern Studies*（略称 FES）を発行することになりました。極東地域研究センターが北東アジアの経済・社会・自然環境を研究対象にしていることから、同誌では社会科学系から自然科学系まで幅広い論文を掲載するとともに、日本の北東アジア地域研究者の方々だけでなく、中国、韓国、ロシアからも投稿があり、論文を掲載いたしました。

ひと口に北東アジアの地域の研究といっても、研究者によって手法は様々であり、また社会科学と自然科学では研究で扱うスパンも異なっています。投稿者の方々は各々の分析ツールで研究をなさっているものと思いますが、極東地域研究センターとしては、日本海側に位置する研究機関としての立ち位置を見つめながら、研究を続けてきました。



写真 2. 極東地域研究センターが発行してきた学術雑誌 FES。

毎年1回発行してきたFESは、2012年3月発行の11号を数えるところで、極東地域研究センターの手を離れ、北東アジア学会（The Association for Northeast Asia Regional Studies）のもとで *Frontier of North East Asian Studies*（略称FES）として発刊することになりました。学会誌になることで、今まで以上に高い水準での論文を掲載することができるのではないかと期待しています。同学会は極東地域研究センターと同様に北東アジアという地域が共通項であり、社会科学、人文科学、自然科学というオールラウンドの研究を行っていますので、北東アジアの全分野の研究の投稿を受け付けます。またしばらくはこれまで同様、極東地域研究センターのスタッフが中心となって編集に携わっていくことになります。同誌は学会員以外からの投稿も受け付けますので、これまでFESへ投稿して下さった方々、お読みいただいた方々をはじめとして、北東アジアという地域を研究している方々の投稿をお待ちしています（投稿原稿の宛先は [henshu-e@anears.net](mailto:henshu-e@anears.net)）。

これまで投稿して下さった方々、並びに同誌の研究水準を維持すべく査読にご協力へいただいた方々、本当にありがとうございます。第一期FESはひとまず終わりますが、第二期FESへの発展的な解消であり、第二期FESがますます発展していくことを願っています。

（文責：今村）

### III 研究紹介（4）—環境研究班・和田直也—

私は野外調査を主体とした植物生態学を専門としています。自然環境の変化は、その場所に行き、そこで起こっている事象を記録し、そして観察を複数年にわたり継続することで見えてくるはずだ、という信条のもと、現地での調査を重視して研究を行っています。調査の対象となる場所は、高山帯や北極圏といった寒冷地です。このような場所は、地球温暖化による影響を受けやすく脆弱な生態系であると考えられています。調査には、理学部の学生も参加し、卒業研究の課題として取組んでもらっています。主な調査地は、富山県立山と極東ロシアのゼイスキー自然保護区、スバルバル諸島ニーオルスンなどです。長期観察により明らかになってきた事実については、別の機会にお話したいと思います。（文責：和田）



写真3. 北極圏にある日本の研究基地“ラベン”（手前右）。



写真4. 立山のハイマツ群落調査地（中央遠方の山は剣岳）。

### IV 英国便り：Being at “Far West”（2）

山本雅資

前回、ノッティンガム大学経済学部の教員の国籍が多様であるということを書きましたが、キャンパスの立地も多様です。というのも私が所属している英国の中央部に位置する University Park Campus に加えて、中国浙江省の寧波市とマレーシアのクアラルンプールの郊外にそれぞれ独立したノッティンガム大学のキャンパスを持っているのです（いずれのキャンパスにも経済学部があります）。日本の大学がアジア諸国にキャンパスを開く日もそう遠くはないのでしょうか。

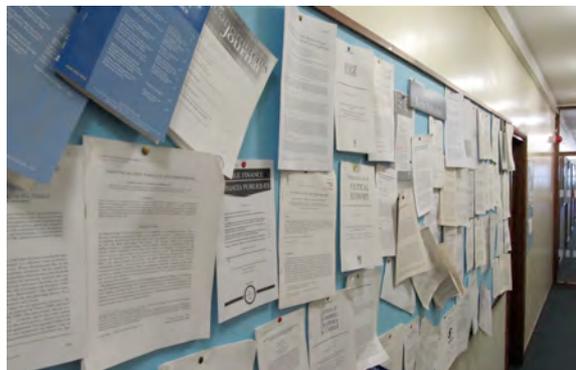


写真5. 所属教員の直近の業績を紹介する掲示板。

一方で、学生に目を向けるとこちらも多くの国々から集まっていることがわかります。学部生900名ほどのうち、最も多いのはイギリス人ですが、大学院になると留学生の方が多いたるところも少なくないそうです。一口にイギリス人といってもその ethnicity は多様です。歴史的な経緯もあり、インド系のイギリス人は非常に多いので、少なくともミッドランドではアジア人と言えば、インド・パキスタン系の人々を意味します。我々日本人は Far East としてくくられます。Far East 風の学生の存在感はキャンパスでも高まる一方だそうですが、その9割は中国人です。マネジメントなど人気のあるコースの修士課程では登録している学生の7割程度が中国人という大学もあると聞きます。これには中国経済圏とEU経済圏の結びつきの強まりも大きく影響しているものと考えられます。

英国に限らず、欧州のあちこちで中国をテーマとしたセミナーやシンポジウムが数多く開催されており、日本にいる時以上に中国の世界経済における存在感の大きさを実感しています。

（文責：山本）